

アンコール王朝の財宝はどこへ行ったか

上智大学教授
石澤良昭

1. バイヨン寺院一約 300 年も年代を間違えていた -

アンコール遺跡の寺院の建立年代は、はっきりしないことが多い。その最も典型的な事例は、バイヨン寺院の建立年代が 300 年も間違っていたことである。

バイヨン寺院は、梵語碑文が解読され始めた 19 世紀末頃から、9 世紀初頭の建立のヤシオドラプラ都城であるといわれてきた。その言説が現存するアンコール・トムと結び付いてしまったのである。誰がそのように言ったかはっきりしないが、遺跡の研究者たちはそれに何の疑問も挟まず、そのまま信用していた。その当時まだ古クメール語碑文が完全に解読されておらず、この臆説を鵜呑みしたのであった。

しかし 1926 年にフランス人美術史家のフィリップ・ステルンが論文「アンコールのバイヨン」を発表し¹⁾、美術様式の編年考察の結果からそれまでの定説を覆す 13 世紀初めという年代を提示した。パリのギメ博物館が収蔵するアンコール美術諸作品を考察しての結論であった。彼はアンコール遺跡を実踏していなかった。この論文に対して当時現地のアンコール遺跡保存事務局長であったアンリ・マルシャルが同意し、幾つかの修正意見をつけ加えた。そして 1928 年にはジョルジュ・セデスが、アンコール・トム都城内で発見された碑文に基づいてこれを裏付けた²⁾。結果的に、遺跡の建立年代はそれまでの説より 300 年も後の 13 世紀初めに位置づけられた。

2. アンコール・ワットは未完成であった

アンコール・ワットはアンコール遺跡群の中で屈指の大傑作といわれ、その壮大な構成とその配置から世界に類を見ないアジア寺院建築の最高峰といわれてきた。碑かに回廊や塔堂の配置、それに建物の石積み構造など、誰もが至高の大寺院として認めるところである。

しかし厳密には、アンコール・ワットは未完成だったのである。当時東回廊北寄りでは浮彫りも素描程度であって、北回廊では彫り込まれてもいなかった。それ以上に、中央本殿の東側基壇には基軸階段もなかったといわれている。後世のアンコール近世碑文が伝えるところによれば、16 世紀になってやっと完成したのである。現在も第二回廊北寄り東面にはデヴァター浮彫りが製作途中のまま未完成となっている。

正確な年代でいえば、1546 年から 1564 年にかけて、東回廊の北寄り部分と北回廊の東半分に現在のような浮彫り彫刻などが施され、完成したのである。さらに詳しく見ていくと、東回廊北寄り部分にはデッサンの素描と粗鑿を入れた浮彫り絵図、完成の一步手前までの浮彫り彫像群などが見られる。これら未完成の浮彫り図像や描出絵図を考察することで、むしろその作業の手順を知ることができる。

東回廊北寄りと北回廊東半分の浮彫りの技法および両面構成などは、12 世紀前半の最盛期には遠く及ばないほど粗雑である。16 世紀中頃当時、カンボジアにはスールヤヴァルマン 2 世時代はどの熟練した彫工がいなかったのである³⁾。

16 世紀中頃の時代は、アユタヤ朝の宗主権も緩み、一息つける時代であった。アンコール・ワットの追加工事および残りの回廊浮彫りは、こうして完成にこぎつけたのであった。

3. アンコール王朝の財宝はどこに持ち去られたか？

当時の東南アジア大陸部の政治情勢は、まず遡って 1431 年頃、アンコール都城はアユタヤ朝軍により徹底的に破壊され、バサン（コンボンチャム州スレイサントー郡）に遷都していた。アユタヤ朝軍はアンコールの財宝を戦利品として待ち帰ったのであった。その後カンボジアはアユタヤ朝の宗主権下に入り、忍従の歳月が流れていった。

盛強を誇っていたアユタヤ朝であったが、16 世紀になってその西隣のミャンマー（ビルマ）にタウングー朝が興起し、瞬く間にアユタヤ朝を脅かすまでの強国となった。そしてアユタヤ朝は 1569 年にビルマの攻撃を受け、18 年間にわたりビルマの属領となった。かつてのカンボジアの財宝も、アユタヤからの戦利品としてビルマのバゴー（ペギー）都城に持ち去られたのであった。ところがこれらアンコールの財宝はバゴーが安住の地ではなかったのである。

1599 年にヤカイン（アラカン）王国の船隊が海岸に近いバゴー都城を攻撃し、これら財宝を持ち去ったのであった。シットウエー（アキヤブ）へ移されたのであった。

その後コンバウン王朝 6 代目パドン王（1782～1819）がアキヤブを征討し、1784 年にマンダレー近くの首都アマラプーラに持ち込まれたのであった。そして 11 代目ティーボー王（1878～1885）治下の 1884 年に、かつてのアンコールの財宝のうち、2 体の神像および 2 体のシンハ、三ツ頭の神象が現在のマナムニ・パゴダに移されたのであった⁴⁾。かつて栄光のアンコール朝にあって多くのクメール人から崇拜されてきた神像は、今度はビルマ人から礼拝され、病氣治癒の効能があるといわれパゴダ内に安置され、やっと安住の地を見い出しているのである。

4. 碑文に刻まれた年代は正しいか

それまでの碑刻文学者は碑文を解読し、「この碑文は何年のものである」と言ってきた。しかし実際にその碑文に刻まれている年代が絶対に正しく確かであるという裏付けはないのである。

よく考えてみると、碑文が伝えている年代は、必ずしも事件が起きた直後とは眼らないのではないだろうか。碑文には寺院建立に関する年代が 1 つもしくは幾つも記されることがある。とりわけ、その寺院で祀られている神々に供物を差し上げた年月が碑文に記されていることが多い。

私たちはそうした碑文が掲げる年代を祠堂そのものの建立年月と混同したりすることがある。これらの碑文の年号には、神・仏を安置した時、御神体を祀った時、「開眼」式の日付、供物・工地を寄進した日時などが記されることがある。これらの碑文の年号は、寺院の建立または完成年月とよく混同されたりすることがある。

よく考察すると、神・仏像を納める「開眼」式は、塔堂建立の前に行われたようである。もちろん神・仏像を安置する台座が据えられた後に碑文が刻まれたのである。台座の大きさを見れば分かることだが、砂岩造りの台座は塔堂の人目よりも少し大きめであることがある。その理由は、先ず台座を入れ、神・仏を安置し、それから建物を建立したのである。手順としてまず神・仏像が安置され、その後建物が神・仏像を囲むように建立されたのである。

今日でもカンボジアあるいはタイにおいて、仏教寺院の建立の際に最も重視されるのは、場所と境界を確定し、その後で仏像を安置することである。仏像はその地域（村落あるいは集落）に安らぎと繁栄をもたらすとされているからである。この神像・仏像は大抵の場

合、末世において功德を得たいと願う寄進者が寄贈したものであった。

5．王の寺院の運営に協力した「村の地主」たち

確かに寺院の建立は王に関係づけられ、何々王の建立した寺院として後世に伝えられている。この場合は、寺院の建立はどれも王が篤信する神・仏とは別に考えた方がよいようである。

「村の地主」(grânavadhbhit)が王の篤信的行為に協力した例が、プリア・カンの石碑(K908)(st.LXXIH)とタ・プロムの石碑(K273)(st.LXII)に記されている⁵⁾。村の地主たちは両寺院に安置されたたくさんの仏像や神々を守って燈明を捧げ、祭儀を執り行なって維持・運営に協力していたのであった。碑文に記載されているように、寺院では教千人にのぼる専属の奉仕者たち(僧侶、舞姫、祭儀補助員、農婦、織女、薬石調合者など)が働いていた。この僧院を維持運営していくために、境内外において衣食住を確保し、必要な物資や食料品を供給してくれる人たちが働いていた。またこの僧院のために附属の荘園みたいな村があって、必要な種々の金品を供給してくれていたと思われる。どの寺院もその維持と運営には大きな負担が伴っていた。碑文を精査していくと、王の寺院・僧院内では、どうも免税措置がとられていたようである⁶⁾。

他の碑文によると、高官も寺院を建立することができたし、その後で王の寺院に加えてもらうよう願い出ていたこともあった⁷⁾。だから願いによって王の勅令をもって王の寺院となれば、寺格が上がると同時に、免税されたのかもしれない。さらに個人あるいは村や集落が建てた寺院もあった。木造寺院もあったと思われる。ほとんどは跡形もなく消滅してしまっただけである。今まで寺院や僧院として残っているのは、石造寺院だけである。

6．寺院建立と神・仏像の安置は別である

現在はカンボジア国境に近いベトナム領プノン・パテの碑文(K3、詩節 VI)⁸⁾は、煉瓦造りの大祠堂(kuti)建設について、年代は不明だがかなり前から安置されたいある神像のために、この大祠堂を建てたと述べている。この祠堂の建立者は神像の安置者でないことは明らかである。さらに碑文は、この祠堂は「6ヵ月で建築された」と言っている。

スールヤヴァルマン1世の治下(1002~1050年)では、1022年以後に建立されたと思われるプノン・スレイ(Phnom Srei)碑文の石碑(K1002,LXIH)においては、某人物がヴィシュヌ神像を安置するために寺院を造らせたという⁹⁾。

ウダヤデティアヴァルマン2世(1050~1066年)時代の有名なSdok Kak Thom碑文(K235)では、9世紀末のヤショヴァルマン1世(889~910年頃)に仕えていた高官がリングを建立したと述べていたが、それを安置する塔堂は結局のところそれから50年以上も後の時代の、ラージェンドラヴァルマン王時代(944~969年)になって建てられたと伝えている¹⁰⁾。

神・仏像を寄進した王が、奉納して間もなく亡くなるという場合もある。その最もよい事例がタ・ケウ寺院である。寺院は完成されないまま放棄されてしまったことになる。ジャヤヴァルマン5世(969~1000年頃)が着工し、ジャヤヴィーラヴァルマン王(1002年)に受け継がれたが、同王は亡くなってしまった。そして工事は現在見られるまま中断されてしまった。この建立中止のおかげで、後世においてどのように石造寺院を建設していったのかという石積みの手順や技術工程を検証することができる。このジャヤヴィーラヴァルマン王を倒した敵方のスールヤヴァルマン1世(1002~1050)は、タ・ケウ寺院

近くの王宮ではなく現在のアンコール・トム内のバプオン寺院の隣にある壮麗な王宮を新築した。

美しい小ピラミッド型のバクセイ・チャンクロン祠堂はハルシャヴァルマン 1 世時代（910 年頃～922 年頃）に建立されたらしく、王は 920 年頃に両親の彫像をそこに安置した。その後そこにはラージェンドラヴァルマン時代（944～969 年）に碑文（K.286、清節 XKV、Baksei Cam Krom）が刻まれ、この王が「漆喰装飾の祠堂を壮麗にした」と述べている。祠堂はその時点ですでに、少なくとも 20 年あるいは 30 年経っていたに違いない。ラージェンドラヴァルマン王の碑文が刻まれた 10 世紀半ば頃では、石材と漆喰が 920 年頃とは異なり漆喰が剥げ落ちていたかもしれない¹¹⁾。碑文を刻んだ人は、漆喰の剥げ落ちた石材表面部分をなめらかにしたのち、その開口部に碑文を刻み込んだと思われる。このように後世に手が加えられ追加工事が入っていたことが判明する。

7．王は 3 事業を遂行する使命があった

新王は即位した後でどんな順番で王の建設事業を進めるのであろうか。

インドラヴァルマン 1 世（877～889 年）が示している都城ハリハララーヤにおいて「即位した年」は 877 年であるが、その歳または 878 年に大貯水池（バライ）インドラタターカ（南北 3.8km、東西 800 m）の着工にとりかかった。第 1 に地域整備の重要課題は両水処理の問題であった。言うなれば広い意味の公共事業に取り掛かったのである。次いで 879 年には祖先の亡き王たちのためにプリヤ・コー寺院を造営した。第 2 に祖先のための寺院建設であった。そして第 3 に 881 年に祭儀を執り行なうためピラミッド型寺院バコンを建立した。

プリヤ・コー寺院にその神々が安置され、開眼法要が執り行なわれたのは、880 年 1 月 25 日 11 時であった。プリヤ・コー寺院の場合は、碑文で述べている年月はそこに祀られている神の開眼式の当日なのである。その祠堂はその後再整備され、現在のような平らな基壇の上に建てられている。

バコン寺院の大きさは、基礎土台が 67m×65m、高さ 14m である。そして濠を造り、濠の土砂を盛土して土手を造る。結局のところ、これら 2 寺院の工事はほぼ同時に併行して始められたことになる。バコン寺院は国家鎮護の寺院であり、アンコール帝国を取り仕切る国家祭儀を執り行なうことは必要であった。王はまず第 1 に地域整備の公共事業、第 2 に祖寺建立、第 3 に国家の中心寺院建設を行なった。王たる者の宿命でもあった。実力者インドラヴァルマン 1 世は 3 事業を 2 年間隔で遂行している。その寺院建設のエネルギーはやはりアンコール・ワットまで続き、アンコール・トムへ突き進むのである。

8．バンテアイ・スレイ建立の年代

有名なバンテアイ・スレイ寺院の場合は、建立者は高官 Yajñvarāha であって王でなかった。この高官はラージェンドラヴァルマン王とその息子ジャヤヴァルマン 5 世の 2 代にわたって仕えた高官の王師（ダル）であった。バンテアイ・スレイ寺院の主神シヴァが祀られたのは 967 年、正確には 967 年 4 月 22 日 17 時である¹²⁾。

もちろん寺院建設の準備を始めたのは、少なくともヒンドゥー教の神々の像が安置される 1 年前であった。現在も賞賛されるほどの壮麗な彫刻や浮彫りを施すわけであるが、967 年の 1 年間で完成したとは考えられない。工事は 967 年以後も続けられていたと考えられる。

しかしながら、ラージェンドラヴァルマン王は 968 年に反乱鎮圧の最中に亡くなった。Yajñvarāha はその王の息子をジャヤヅアルマン 5 世として登位させ、新王を盛り立てるために政治に専念したと思われる。

このような状況でバンテアイ・スレイ寺院が建立され、さらに整備が進んだのではないだろうか。この王師は 985 年まで生存していたので、バンテアイ・スレイ寺院を見事なまでの傑作に仕上げ、今日見られるような精華を創り出したと思われる。だから建立年代とされている 967 年は、バンテアイ・スレイ寺院の着工の年代であり、完成までに 30 年近くもかかったと思われる。

さらに次の事例として、東メボン寺院では、神像が祀られたのは 953 年初めであるが、この寺院の基礎は土台の建設は大体 920 年頃から着工され始めたという。メボン寺院を建築したといわれている建築家 Kavindrarimathana が 920 年頃からこの建設に携わり、950 年を過ぎてもなお関係していたと思われる。たぶん完成まで現場で指揮をとっていたのであろう。この建築家が亡くなるのは 960 年であるから、こうした実際の年数を推察して加算してみる必要があるのである。

これらの事例に見られるように、大寺院の建立年代には現在いわれている 1 つの年代ではなく、その後数十年を経て完成に至るわけであるから、実際に建設する年代を含めて考える必要がある。

9. アンコール遺跡の寺院建立の年代についての疑問

神・仏像の安置もしくは開眼供養の時には寺院は新築されていたとすると、簡単な藁造りの仮設の建物で行なわれるだけであったと思われる。神・仏像の奉納者は、神・仏像を安置し、祭儀を執り行なうことが最高の篤信であると考えていたようである。

しかしながら落慶法要というのは別問題であったかもしれない。もしかしたら建設資金を込みで考えていなかったかもしれない。神・仏像が安置されてから村々をまわり、篤信者から資金を集め、寺院や祠堂を建設していたこともあったようである。仮設の建物のまま、運悪く寺院が未完成のまま続いた場合もあったと想定される。

アンコール遺跡の建立年代については、寺院にある碑文で決まることが多い。神・仏像が安置された年月日が明記されていて、これが決め手となって年代がほぼ確定する。

しかしながら、数多くある遺跡の中には、こうした碑文や創建者や開眼供養などの年号の載った碑文が欠落し、全く年代が触れられていない遺跡もある。例えばバンテアイ・サムレなどがある。この場合どのようにして時代を決めその遺跡を位置づけていくかは、専門家が装飾・美術様式や建築様式などに基づき比較研究をしながらおおよその年代を総合的判断で推定していく方法しかないのである。

その方法論は、先ず美術様式の編年と文様から、彫刻手法・図像などのタイポロジーを比較検討して決めていく。アンコール遺跡は多くの場合、こうした関連碑文の考察と併せてタイポロジーでだいたい年代を推定していくのである。その意味ではごく少数の例外的遺跡を除いて、建立の絶対年代はないと考えてよいのである¹³⁾。

10. 王位継承戦争で都城・王宮・寺院が破壊された

王が逝去すると建設中の寺院の工事は中止となり、そのまま放置されて現在に至っている場合が多い。工事の途中放棄は工事の手順等を実際に検証できるので研究の手掛かりとなる。

当時の王をはじめ担当責任者が推進してきた建造物がそのまま残るのである。しかしな

が恒例として次の王が続けて完成させることがなかった。その理由は、新王たる者が新しい公共事業、祖寺・寺院建設を自己の権勢を見せるためにぜひとも行なう必要があったといわれてきた。執政者たる者の自己顕示欲であったと思われる。

しかしながら実際に王位の継承前後を考察すると、その王位継承にはほとんど戦闘が伴っていたのである。新王は敵方の前王とその後継者を自負する勢力を叩き潰さねばならないのである。前王勢力は都城に立てこもり、有利な戦いをしようとしたのではないか。木造の王宮や家宅が焼き討ちになってしまっていた。結果として戦闘の後には王宮や寺院が破壊され、事実上再使用できなかったのではないか。だから新王とその取り巻きたちは、こうした現場の破壊された実情から新王宮と寺院をはじめから造らねばならなかった。

話題を現代に移すと、シェムリアップ市内においても、放置されたままの寺院がいくつもある。僧侶にどうしてこれら放置された寺院を再建しないのかと聞いたところ、放棄された寺院を苦勞して建て直すよりも、新しい寺院を建設する方が資金も集まり賛同者も多いということだった。

こうしたアンコール遺跡の保存修復を往時の王位継承戦争から考察するならば、アンコール時代においても破壊された王宮・寺院を再建するよりも新しく造営した方が容易であったのかもしれない。

この根本的な問いは、前の時代の寺院の修復をなぜやるのかという考え方にも抵触してくる。さらに保存修復概念を発展的に考えるならば、アジアでは多くの場合木造や粘土、レンガ、それに軟らかい砂岩などが主建材となってきた。アジアでは西欧の大理石のような硬い石材の文化遺産の保存修復とは違う概念が形成されてきたのではないか。建設が容易であることがアンコール王朝時代も1つの考え方として機能していたのではないか。アジアの遺跡の存在を問う根本的な問題である。同じ光景がミャンマーのパガン遺跡にも見られる。

[注]

- 1) Stern, Philippe: *Le Bayon d'Angkor Thom et l'évolution de l'art Khmer*, Paul Gauthrer, Paris (1927)
- 2) Cœdès, George: *Etudes Cambodgiennes 19. La date du Bayon*, Rééd, 1989, Paris, *Articles sur le pays khmer*, 1, pp. 95-126
- 3) Jacques, Claude: *Angkor*, Bordas, Paris (1990)
- 4) Boisselier, J.: *Notes sur l'art du Bronze dans l'ancien Cambodge*, *Artibus Asiae* (New York Univ.), vol. XXIX, 4 (1967), pp. 312-334, New York
- 5) *BEFEO*, Tome XLI, p. 292 (1941) et Tome VI, p.77 (1906)
- 6) 石澤良昭「前アンコール時代の碑文に見られる神の区域」『古代王権の誕生Ⅱ 東南アジア・南アジア・アメリカ大陸部』角川書店 (2003年)、pp. 35-49
- 7) K.19, *Inscriptions du Cambodge*, VI, p. 143 (1906)
- 8) *BEFEO*, Tome XXXV, p. 7 (1935)
- 9) K.1002, Sk.*BEFEO*, Tome LIV, p. 605 (1947)
- 10) K.235, *Les stèles de Sdok Kak Thom*, *BEFEO*, Tom LIII, pp. 57-134 (1943-1946)
- 11) *Inscription du Cambodge*, IV, p. 100-101 (1952)
- 12) Jacques, Claude: *La date des Monuments Khmers*, *Académie des Inscriptions & Belles-Lettres (Comptes Rendus)*, Séance de l'année 1992 novembre-décembre, pp. 883-890
- 13) Jacques, Claude: *Angkor, vision de palais divins*, Hermé, Paris (1997)



写真1 ミャンマー・マンダレー市内のマムニ・パコダ

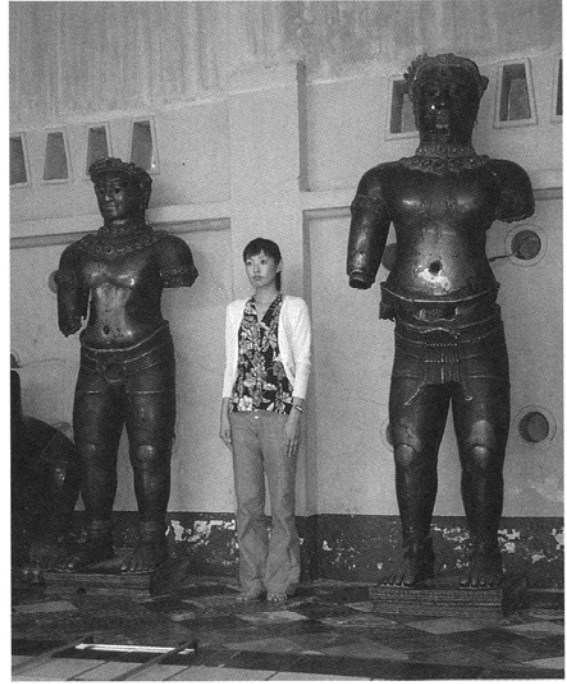


写真2 青銅像2体、アンコール時代のドヴァラパーラ立像 (13世紀)



写真3 アンコール時代のシンハ像 (青銅製) (13世紀)



写真4 アンコール時代のドヴァラパーラ立像 (青銅製) (13世紀)